

YOKOHAMA RIVER

川のはなし

KAWA NO HANASHI

第十一稿 宮川（金沢地区の新田開発と河川改修）

宮川は、金沢区を西から東に流れる流路延長約2.7km、流域面積約7.98km²の2級河川です。

第十一稿は、金沢地区の新田開発、河川改修及び市民協働の取組について紹介します。

1 宮川とは

宮川は、金沢区釜利谷町付近を源流として東に向かい、途中で右支川と左支川と合流し、さらに谷津川と合流して平潟湾に注ぐ単独水系の二級河川です。

上流付近は、交通の便が良いため大規模な開発が進み、著しく市街化されていますが、近くに「金沢市民の森」や「金沢自然公園」があり、横浜市内でも緑の多い地域に接しています。

中流は県道泥亀釜利谷線と平行し、右岸には住宅地、左岸には商業施設が林立しています。下流の金沢文庫駅から国道16号線にかけては、公共・文化・商業施設が集中し、区の中心部となっています。



案内図（現在）

A



宮川の様子（京急交差点付近から下流側を望む）

B



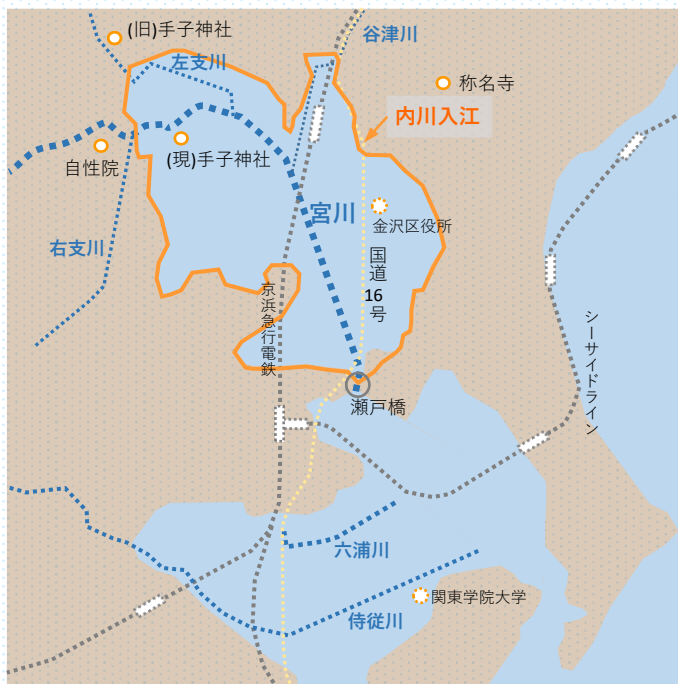
宮川の様子（桜橋付近）

2 金沢地区の新田開発

横浜では、第七稿及び第十稿で紹介しました関内駅周辺の吉田新田や横浜駅周辺の新田開発が有名ですが、金沢地区においても平潟湾の入海で新田開発が行われています。

金沢地区の新田開発は、案内図(中世)のとおり、主に宮川流域にあたる入海と六浦川及び侍従川流域にあたる平潟湾の一部となりますが、新田開発までは現在の金沢区役所や関東学院大学は海であったことが分かります。また、現在では野島は孤島となっていますが、陸続きであることも確認できます。本稿では、主に現在の宮川流域（現在の金沢区釜利谷東1丁目、大川、泥亀等）にあたる、内川入江を中心に紹介します。

中世（鎌倉時代(1185年頃)～室町時代(1573年頃)）において、平潟湾は鎌倉を支える港のひとつとして繁栄していました。この地域は「むつら」とよばれ、生活の物資が集まる港として、内外に向かう海の玄関口として重要な役割を担い、称名寺を中心として鎌倉に劣らない仏教文化が栄えた地域でした。



案内図（中世：鎌倉・室町時代）



六浦、平潟湾の模型（中世：鎌倉・室町時代）

近世(安土桃山時代(1573年)～江戸時代(1868年))に入ると、平潟湾の入海において、永島家が何代にもわたり新田開発を行いました。瀬戸橋の南側は平潟湾、北側に広がる入江が内川入江となりますが、新田開発の先導を切ったのは、湯島聖堂の儒官・永島裕伯(すけのり)でした。

裕伯は、寛文8年(1668年)に平潟（現在の乙舳(おっとも)町と平潟町の一部）と走川（寺前一丁目の西部域）の2か所に新田を造成しました（本稿では以下「平潟新田、走川新田」という。）。絵図Dにおいて、平潟新田は泥亀新田字平潟の付近、走川新田は絵図には出てきていませんが、内川入江内の谷津村の付近となります。走川新田及び平潟新田は、「泥亀新田」とも名付けられ、延宝3年(1675年)に泥亀新田村となり、永島家の屋敷もこの村の一画にありました。

村の名称は、明治期の市町村制施行で金沢村となりましたが、現在の金沢区役所周辺は、町名で「泥亀」の名が残されています。泥亀は、裕伯の号「泥亀」から名を取ったとされています。



案内図（中世 寛文8年(1668年)頃）



武蔵国久良岐郡泥亀新田文書 平潟湾周辺絵図 寛政9年(1797年)頃

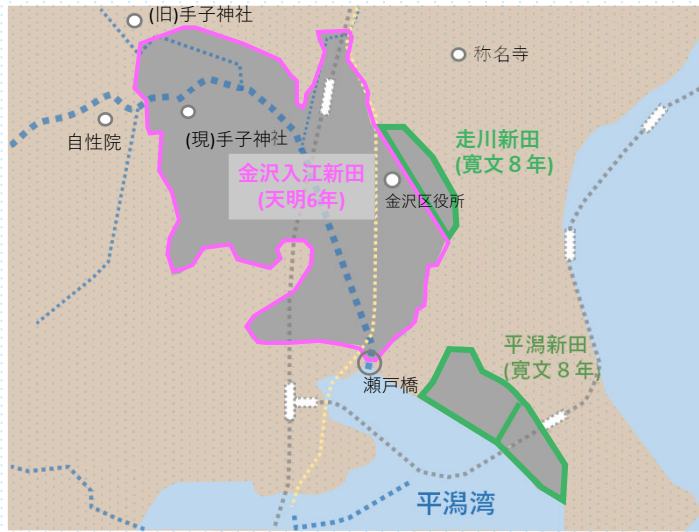
引用) C：横浜市歴史博物館所蔵（博物館内模型の写真に横浜市道路局河川企画課で名称を追記）

D：神奈川県立公文書館所蔵

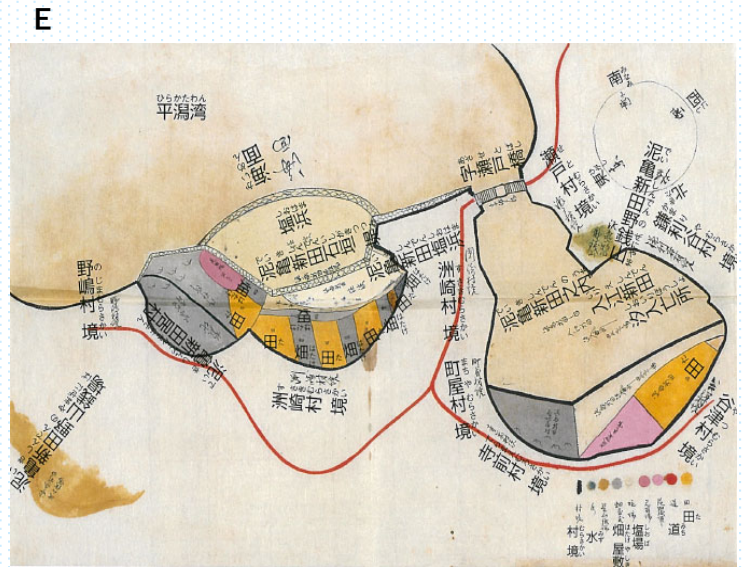
平潟新田及び走川新田の完成後は、台風や高波、元禄16年(1703年)の相模トラフ大地震、元禄17年(1704年)の富士山噴火(富士山の噴火については第10稿参照)等により多くの被害が発生しながらも、生活の糧となっていた新田の復興に力を注がれました。

天明6年(1786年)には、内川入江内に金沢入江新田が造成され、宮川誕生の契機となりました。

金沢区中心地の礎を築いた永島家の長きにわたる新田開発の歴史は、今なお語り継がれています。



案内図(中世天明6年(1786年)頃)

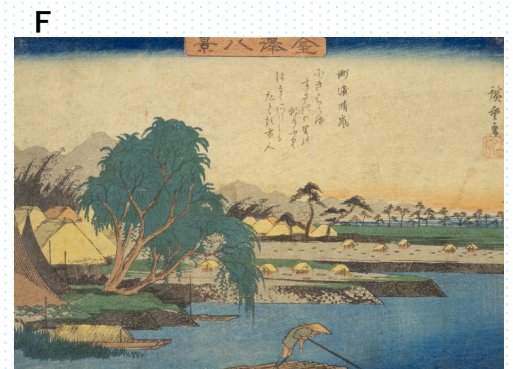
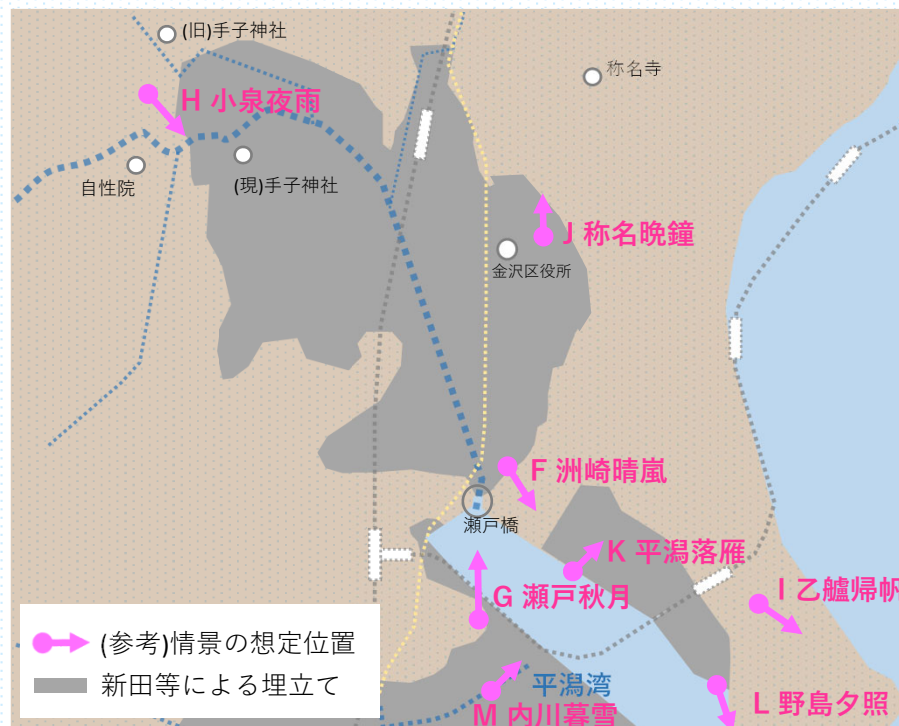


天保十四年武州久良岐郡泥亀新田金沢入江新田絵図面
天保14年(1843年)

3 金沢八景

金沢の風景の美しさは中世鎌倉時代から認識されていましたが、元禄7年(1694年)に金沢の地に立ち寄った心越禅師(しんえつぜんし)が能見堂(現在の能見台)から見た景色を、故郷中国の瀟湘(しょうしょう)八景の地と重ねました。瀟湘八景は、二文字で表現される情景【晴嵐、秋月、夜雨、帰帆、晚鐘、落雁、夕照、暮雪】が八景の中核であり、この二文字に金沢の地を組合せた漢詩によって金沢八景の名は高まり、観光が盛んとなりました。

金沢八景の情景は、歌川広重が描いており、瀬戸秋月(写真G)や小泉夜雨(写真H)では埋立て前の入海の様子を確認することができます。八景の二文字は、橋梁等の公共施設の名称にも使用されています。



洲崎晴嵐(すさきのせいらん)



瀬戸秋月(せとのしゅうげつ)

H



小泉夜雨(こいずみのやう)

I



乙鱸帰帆(おっとものきはん)

J



称名晩鐘(しょうみょうのばんしょう)

K



平潟落雁(ひらかたのらくがん)

L



野島夕照(のじまのせきしょう)

M



内川暮雪(うちかわのぼせつ)

4 河川改修

昭和40年代に入ると急激な市街化が進展し、降雨時の河川からの溢水による浸水被害が増大しました(写真N、O)。宮川では、浸水被害の軽減を図るため、待橋上流端部から瀬戸橋までの全長2.04kmにおいて、都市小河川改修事業(現在は都市基盤河川改修事業に移行。)により河川改修を行っています。これまで宮下橋上流側から瀬戸橋までの区間は改修が完了し、現在は待橋の架替事業を進めています。



案内図 (現在)

N



宮川橋付近 (年数不詳)

O



宮川橋付近 (昭和57年)

引用) H~M: 国立国会図書館所蔵
N、O: 横浜市道路局河川企画課所蔵

P



河川改修前（新瀬戸橋上流側 昭和58年）

Q



河川改修後（新瀬戸橋上流側 昭和60年）

5 宮川川づくり活動

現在宮川（中井橋～宮下橋）では、川づくりコーディネーター制度による川づくり活動を行っています。宮川の河川清掃を長年行っている水辺愛護会「カマリヤンクラブ」のメンバーを中心とし、水澄む宮川を目指して「川の生物が生息しやすい環境づくり」、「宮川に関する広報」等に取り組んでいます。

「川の生物が生息しやすい環境づくり」では、川のヘドロの削減の検討、石組みによる魚類等の棲み家や石組水制工づくり、生物調査等を川づくりコーディネーターのアドバイスに基づき行っています。

R



参加者による石組水制工づくり

S



生物調査の様子

また「宮川に関する広報」では、宮川の生き物や川づくりの活動を地域の人に知ってもらうため、川沿いに設けたアルミパネルや親水拠点の掲示板を用いて、参加者による宮川の情報発信を行っています。

T



アルミパネルによる情報発信

U



掲示板の活用による情報発信

【川づくりコーディネーター制度】

市民協働による河川環境整備を展開するために、川づくりを希望する市民の方々に対して、専門家（川づくりコーディネーター）の派遣や資材支給を行い、川づくり活動を支援する制度

引用) P、Q：横浜市道路局河川企画課所蔵

R：水辺愛護会カマリヤンクラブ所蔵

S～U：横浜市道路局河川企画課所蔵

市内外河川の水位情報がわかる
「横浜市水防災情報」のページはこちら

横浜市 水防災

検索

